

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2015

課題番号：25303026

研究課題名(和文) 考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究

研究課題名(英文) Study on the formation process of Vietnamese wooden architectural style through research of archaeological objects and other reference materials

研究代表者

友田 正彦 (TOMODA, Masahiko)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・保存計画研究室長

研究者番号：70392553

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,100,000円

研究成果の概要(和文)： 実物遺構が現存しない14世紀以前のベトナム木造建築の上部構造の解明に寄与することを主目的に、建築型土製品等の考古遺物と現存建築遺構等の現地調査をベトナム北部各省と中国国内で計6次にわたり実施した。これにより、ベトナムにおける中国建築様式の段階的かつ選択的な受容のあり方について新知見を加えるとともに、ベトナム木造建築様式の独自性が李・陳朝期に溯ることを明らかにした。

ハノイでの研究会開催や、日越両語による研究論集の刊行を通じ、ベトナム北部出土建築型土製品の調査データも含めた研究成果を公開するとともに、従来あまり知られていなかった研究資料を提供することができた。

研究成果の概要(英文)： Aiming for revealing the superstructure of Vietnamese wooden architecture before 15th century, of which no standing example remains to date, in total six times of field investigation on such archaeological objects as earthenware with shape of a miniature building and architectural remains from different periods were conducted in northern provinces of Vietnam and in China. As a result, we could add new perspectives concerning step-wise as well as selective introduction of Chinese architectural elements to Vietnam, and elucidate that uniqueness of Vietnamese wooden architectural style goes back to Ly and Tran periods.

Through holding a seminar in Hanoi and publishing a book of collected papers, we publicized the research results including survey data of the earthenware representing architecture, which were unearthed in northern Vietnam, offering information of the research materials that were not widely known before.

研究分野：建築学、文化財保存計画

キーワード：建築史 考古学 ベトナム 木造建築

### 1. 研究開始当初の背景

(1) ベトナム木造建築の現存遺構は15世紀末以降建立のものにほぼ限られ、これ以前の様相については不明な点がきわめて多い。タンロン皇城遺跡をはじめとする李・陳朝期(11-14世紀)の建築遺跡の考古発掘事例が徐々に増える中、失われた木造上部構造を考察する手掛かりが求められていた。

(2) 研究代表者らは、タンロン皇城遺跡保存に協力する中で、ベトナム社会科学院都城研究センターと共同で、同国北部出土の建築型土製品についての調査を数年来継続してきており、これをより広く李・陳朝期の木造建築に関する研究に発展させることがベトナム側からも期待されていた。

### 2. 研究の目的

(1) ベトナム北部の建築型土製品に関する調査をさらに継続・拡充して悉皆的な情報を得るとともに、新たに調査対象範囲を中国南部に拡大して同地域における類似遺物の出土状況や同時代の現存建築遺構等を現地調査し、両者を比較分析することを通じて、木造建築様式の両地域間の共通性と相違性について考察し、そこでの様式伝播の様相を明らかにするとともに、実物遺構が現存しない14世紀以前のベトナム木造建築の上部構造の解明に寄与することを目的とした。

(2) 遺構と遺物の両面における考古学的調査の成果を建築史研究に活かすことにより、実物遺構のない時代の建築について考察するための新たな研究手法を提示すると同時に、国内ではとかく文化的独自性が強調されがちなベトナム文化の重要な要素である木造建築を東アジアの広域的視点から客観的に位置づけ直すことを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) ベトナム北部の各省において、博物館等の施設に収蔵されている建築型土製品をはじめとする主に李・陳朝期の建築関連遺物を出来る限り網羅的に調査・記録すると同時に、関連する考古調査の記録等を入手・検討し、これらの情報を総合したデータベースを作成することで、この種の遺物の全体像を把握するとともに、詳細な比較分析のための基盤を確立した。

(2) 同地域に現存する黎朝期以降の木造古建築遺構を実地に調査し、それらに見られる意匠や構造形式上の特徴を分析することで、古式と考えられる要素を抽出するとともに、上記考古遺物について考察するための手掛かりを得た。

(3) 中国華南地域において、主に唐～宋時代の建築実物遺構や、木造建築に係る要素を有する考古学的遺物等を調査し、当時の

中国における建築様式や、その造形物への反映のあり方を理解することで、ベトナム北部地域における様相との比較検討材料を得た。

### 4. 研究成果

(1) ベトナム北部出土の建築関連遺物については、平成25年8月、27年3月、27年9月の3次にわたり、ハノイ、バクニン、タイビン、ナムディン、タインホア、ゲアン、ヴィンフック、ハザン、トゥエンクアン、イエンバイ、ハナム、バクザン、クアンニンの13省市において、ベトナム社会科学院都城研究センターと共同での現地調査を実施した。これには博物館収蔵庫内の未整理遺物や考古発掘調査が継続中の現場における知見も含んでおり、特に建築型土製品については、現時点までに検出されている遺物の大半を網羅できたものと考えている。ただし、特に調査時期が早いものや学術調査によらない発見遺物や伝世品については、来歴や出土状況が不詳あるいは不明な場合が殆どで、一部には贋作の可能性が疑われるものもあるなど、資料としての扱いにはなお慎重を要することも事実である。

(2) 一方、木造建築の実物に関連する遺物は、屋根瓦類を除けば、礎石や埴などの下部構造に由来するものがその大半を占めており、特に木製部材で李・陳朝期以前に溯ると考えられる遺品はきわめて少数であった。屋根瓦については遺物点数が膨大であることに加え、先行研究も少なからずあることから、今回の調査では主たる対象とはせず、調査の過程で特に目にとまった特徴的遺物について観察記録するにとどめた。

(3) 李・陳朝期の製作と考えられる建築型土製品の種別としては、小仏塔が圧倒的多数を占め、漢代の明器において一般的な複数棟からなる邸宅状模型は数点しか確認されなかった。小仏塔には比較的小型の一体成型品と部位毎に製作したパーツを組み立てる大型製品とがあり、特に後者においては屋根や壁面に瓦葺や組物など、木造建築の構造意匠に関する表現が多く見られる。

(4) 対象遺物において観察された木造建築表現は、あくまで外観に現れる要素だけであるが、以下のような特徴が認められた。

隅柱上に大斗を置き、これで太い桁を支承する例が少なからずみられる。この場合には頭貫は用いられない。また、頭貫を用いる場合も含めて、台輪は全く用いられない。

桁上にはしばしば組物が用いられる。組物は詰組で大斗・肘木・巻斗からなる三斗形式を基本とする。また、手先に横方向の三斗を組まない、中国建築で偷心式と呼ぶ形式だけが見られる。

大斗斗尻の両脇に線形付の材を置く例が散見される。また、組物相互間には大抵の場

合、装飾的な中備が用いられるが、その形式は宝珠形の輪郭をもつ la de (菩提樹の葉) と呼ばれるモチーフにほぼ限定される。

軒裏に垂木や母屋を表現する作例は見出せない。塔模型の多くは軒を段状の持ち送りとしており、木造の細部形式を採り入れた埴塔を模型化したものと考えた方が合理的と思われる。手先肘木先端の斗上に龍やガルダ、キンナリなどの彫像を置いて軒先を支持する例も少なからず見られるが、このような彫像が載った実大組物の石製品がバクニン省佛跡寺やナムディン省 Chuong Son 塔遺跡などで出土していることから、そのような細部形式を持つ埴塔が李朝期に実在したことが分かる。

建築型土製品の屋根葺材はいずれも瓦葺きで、丸瓦と平瓦を交互に用いる本瓦葺と、先端が半円状の板瓦を互い違いに重ねる鱗瓦葺(仮称)の2種に大別される。仏塔模型では本瓦葺にほぼ限定され、鱗瓦葺は邸宅状模型の一部建物や陳朝皇帝陵出土品を含む少数の大型模型にのみ用いられている。いずれの場合においても、瓦の形式や葺き方は、同時代の実物の瓦遺物と特に矛盾する点はない。これは、特徴的な la de 形の軒先装飾などについても同様である。

(5) 木造建築の実物については、上記各次の調査において、大悲寺、延應寺、法雲寺、寧福寺、天福寺など、黎朝期(15-16世紀)から莫朝期(16-19世紀)にかけての遺構を中心に調査を行った。特に注目される特徴は以下のような諸点である。

柱下には礎盤を用いず、柱が著しく木太く、強い胴張りをもつほか、側柱には内転びがある。

頭貫を省略する傾向があり、胴差が発達する一方、柱を貫通する貫を用いない。

大梁を受ける身舎柱上や繫梁を受ける側柱上に大斗を据える形式が特に建立年代の古い建物において見られる。円形の梁断面や水平の繫ぎ梁が古式と考えられる。

軒の支持は登り梁式が最も普及しており、稀に挿し梁式があるが、いずれも軒の出は短い。組物の使用は大悲寺開祖堂とタイビン省神光寺鐘楼にほぼ限定される。いずれも台輪上に二手先の偷心式組物を詰組に配るが、構造的な役割は乏しく、装飾としての意味合いが強いように感じられる。

少なくとも現状では、悉く鱗瓦葺であり、本瓦葺の例は仏堂では見られない。

(6) 中国国内では、平成26年2-3月、同9月、同11月の3次にわたり、北京、河北、上海、江蘇、浙江、福建、広東の各省市での現地調査および専門家との意見交換を行った。事前の計画では、ベトナムの李・陳朝期に対応する唐代から宋・元代にかけての建築的模型製品の調査が大きな目的であったが、結果的には、同時代においてこのような作例

が非常に少ないことが判明した。特に大型の陶塔は北宋期の福州涌泉寺塔にほぼ限られ、同時代の鉄塔や石塔を加えても、ベトナムの塔模型との意匠・構造形式上の共通点はきわめて少ない。

(7) 中国での建築実物遺構調査は、倣木石塔と呼ばれる木造細部形式を模した石塔も含めて行い、特に華南地域における特徴の把握に努めた。この結果、頭貫台輪の使用が遅いことなど、ベトナムでの調査知見との比較からいくつか注目すべき点があったが、やはり直接の類似点は少ないことが確認された。

(8) 以上の調査および分析結果を総合すると、木造建築における中国宋様式のベトナムへの伝播は限定的であり、むしろさらに古い時代に中国から採り入れられた様式が後代まで強く影響を残している可能性が高いといえる。中国では後漢から南北朝期の遺物に見られる要素が宋時代の要素と混淆するような様相がベトナムの李・陳期建築型土製品、さらには黎朝期の木造建築には見られる。一方で、登り梁の採用などは民家とも共通する在地の建築技術の存在を示唆するほか、装飾的細部の意匠や屋根瓦の形式においてはチャンパなどの東南アジア系諸文化の影響も考慮する必要がある。今後はこのような観点も含めて、ベトナム木造建築様式の形成過程をより詳細かつ多面的に解明していく必要がある。

(9) 平成28年2月22日から24日まで、ハノイ市内のベトナム社会科学院本部にて、研究会「歴史考古資料を通じて李陳朝期以降のベトナム建築を特定する」を同院都城研究センターと共催した。本科研メンバーの友田、清水、大田と考古・建築・歴史分野のベトナム人研究者11名が口頭発表を行ったほか、他の参加者も交えた討議を行った。このようなテーマでの研究会は同国でも初の試みであり、大きな反響があった。

(7) 以上の研究成果は、日越両語併記の論集にとりまとめて刊行した。本書には、ベトナム北部出土の建築型土製品等に関する調査台帳データも付録している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

大田省一、ベトナムの都市と建築 - ハノイとホーチミン市 -、歴史と地理 - 世界史の研究、査読無、236巻、2013、53-56

友田正彦、李陳朝期の模型に見られる建築表現、「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、査読無、2016、1-29

大田省一、ベトナム現存の木造建築と模型の比較と分析、「考古遺物等を通じたベトナム

ム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、査読無、2016、31-44

清水真一、ベトナム古建築の特徴と外来様式受容のあり方、「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、査読無、2016、45-72

ファム・レ・ファイ、同時代史料からみる李陳朝期の建築部材及び建築技法、「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、査読無、2016、73-101

小野田恵、漢代建築模型の建築表現からみたベトナム古建築への初源的影響、「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、査読無、2016、103-114

上野祥史、ベトナム出土建築関連資料の比較検討、「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、査読無、2016、115-126

〔学会発表〕(計9件)

友田正彦、清水真一、ベトナム北部出土の建築型土製品における屋根瓦の表現、日本建築学会、2013年9月1日、北海道大学(北海道札幌市)

OTA Shoichi, Planning a Vietnamese village: a crossroad of the Eastern and Western planning culture, Architecture des villes d'Asie du Sud-Est: vers des expressions de la modernité en rapport avec les héritages, 2013年6月13日、パリ(フランス)

友田正彦、清水真一、大田省一、ベトナム北部出土の土製品からみた木造建築軸部の特徴 - 頭貫を用いない軸組構造をめぐって -、日本建築学会、2014年9月12日、神戸大学(兵庫県神戸市)

UENO Yoshifumi, Chinese Style Items in the Social System of the Early States in East Asia, SEAA6 (Sixth Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology, 2014年6月9日、ウランバートル(モンゴル))

上野祥史、漢代諸侯王陵与漢代墓制研究、漢代陵墓考古与漢文化国際学術検討会、2014年10月11日、徐州(中国)

友田正彦、李陳朝期の模型に見られる建築表現、研究会「歴史考古資料を通じて李陳朝期以降のベトナム建築を特定する」、2016年2月22日、ハノイ(ベトナム)

大田省一、ベトナム現存の木造建築と模型の比較と分析、研究会「歴史考古資料を通じて李陳朝期以降のベトナム建築を特定する」、2016年2月22日、ハノイ(ベトナム)

清水真一、ベトナム古建築の特徴と外来様式受容のあり方、研究会「歴史考古資料を通じて李陳朝期以降のベトナム建築を特定する」、2016年2月22日、ハノイ(ベトナム)

ファム・レ・ファイ、同時代史料からみる李陳朝期の建築部材及び建築技法、研究会「歴

史考古資料を通じて李陳朝期以降のベトナム建築を特定する」、2016年2月22日、ハノイ(ベトナム)

〔図書〕(計1件)

本課題研究者一同、私家版、「考古遺物等を通じたベトナム木造建築様式の形成過程に関する研究」論集、2016、136

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

友田 正彦 (TOMODA, Masahiko)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・保存計画研究室長

研究者番号：70392553

### (2) 研究分担者

大田 省一 (OTA, Shoichi)

京都市芸繊維大学・大学院工芸科学研究科・准教授

研究者番号：60343117

### (3) 研究分担者

清水 真一 (SHIMIZU, Shin'ichi)

徳島文理大学・文学部・教授

研究者番号：70359446

### (4) 研究分担者

上野 祥史 (UENO, Yoshifumi)

国立歴史民俗博物館・研究部考古学研究室・准教授

研究者番号：90332121

### (5) 研究協力者

小野田 恵 (ONODA, Megumi)

### (6) 研究協力者

ファム・レ・ファイ (PHAM, Le Huy)

### (7) 研究協力者

ブイ・ミン・チー (BUI, Minh Tri)

### (8) 研究協力者

グエン・ヴァン・アイン (NGUYEN, Van Anh)